

私の勤務する(一社)北海道開発技術センターでは、2014年から毎月自主事業の一貫として、アイヌ語地名研究会にお願いし、同会会長、藤村久和先生を講師としてアイヌ文化、アイヌ語地名に関する勉強会を実施しています。藤村先生は、アイヌ語を母語としていた古老達が健在だった頃、その方々と直に触れ合い、生きたアイヌ文化、アイヌ語を学ばれた方であり、その知識の深さ、広さにはいつも驚かされます。本稿は、藤村先生のお話を私の拙い理解の範囲でまとめ、先生の校閲を経る、ということで引き受けました。

お恥ずかしいことに、4年前までは私も標準的な道民同様、北海道には先住民としてアイヌの人々がいるという程度の認識しかありませんでした。ところが、軽重はありますが、自然や物も含むこの世界のあらゆる存在をカムイ(神)と看做し、それら神々との密接な関わり合いにより構成されるアイヌ文化の豊かさ、さらに日本の基層文化といわれる縄文文化との結びつきを知るにつれ、その魅力にはまり、ついにはなんとアイヌ語まで学ぶようになりました。きっかけは、2014年に国土交通省北海道運輸局のビジットジャパン事業で招請した、ナショナル・ジオグラフィックの世界的写真家であるクリス・レイニア(Chris Rainier)氏が、アイヌの方々の撮影ができるなら、と来道されたことです。レイニア氏は、子供時代に何かの本でアイヌ民族の存在を知って以来、憧れ続けてきたそうです。その際、私が事前準備のための参考資料として藤

# 私がアイヌ文化にはまったわけ



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター調査研究部研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モントレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

村先生の著書『アイヌ、神々と生きる人々』を読み、先生からアドバイスをいただく機会を得たことから、当センターで勉強会を開催するに至りました。

また、北海道の自然とアイヌ文化を高く評価したレイニア氏の推薦により、従来、日本では本州のゴールデンルートに限定されていたナショナル・ジオグラフィックのツアーが、毎冬、道東に入るようになりました。それと競うように、同社と傾向の似た、富裕層を顧客とするゼグラム社も、継続的に同様の北海道ツアーを催行しています。ゼグラム社はさらに、今年5月下旬から6月にかけて、ある程度の水深があれば入港可能、全室スイートルームという探検用小型クルーズ船で、インバウンド系では世界初の約2週間に及ぶ北海道1周ツアーを実施しています。そして、この船が網走港に入港した際に船内で行われたアイヌ詞曲舞踊団「モシリ」の公演は、乗客からスタンディングオベーションによる最高の評価を受けました。

以上のような経緯で始まった「アイヌ文化勉強会」は、今年9月で50回を数えます。勉強会は、64年間もの長きに亘り本道に滞在、アイヌの人々と深く交流しその困窮を助けた、英国聖公会宣教師ジョン・バチラーの著書の訳書「アイヌの暮らしと伝承(原題: AINU LIFE AND LORE)」をテキストとし、藤村先生が解説を加えるというかたちで進めています。次回以降、勉強会のなかから特に興味深いテーマをいくつか選び紹介していきます。



藤村 久和氏

北海学園大学名誉教授。北海道を代表するアイヌ文化研究者の一人。アイヌ民俗学全般を研究領域とし、アイヌに関する精神文化、口承文芸、民族医療、整体儀礼等の文化研究、アイヌの生態・文化保全に関する自然との共存に関する研究の他、アイヌの古老からの聞き取り作業や近年はアイヌの食事文化やアイヌ文化からみた食育等も研究している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)『アイヌ学の夜明け』(梅原猛との共編、小学館、1990年)等。